

第2回「I S P Sハンダ グローバルカップ」

配布資料

この度の記者会見の背景を、より良く知って頂くために、先日 JGTO に提出した手紙の、一部を抜粋して紹介致します。

この記者発表には、二つの趣旨があります。一つは、今年度のグローバルカップの概要を、メディアの皆さんに知って頂くことです。主には、外国人招待選手の最後発表です。もう一つは、I S P S とゴルフ界にかかわる、新たな試みの発表です。

こちらの方が、より重要な発表です。

じつは、6月6日から I S P Sハンダと、PGA ツアー・オブ・オーストラレイジアが、パートナーシップを調印し、協力体制で合体するのです。そして、ツアーの名称も「I S P S HAN DA PGA ツアー・オブ・オーストラレイジア」になります。

現在、PGA ツアー・オブ・オーストラレイジアは、年間16試合あります。その内、1億2千万円以上の試合は、ティアワンと呼びます。これは7試合あるのですが、今後は全てヨーロッパツアーとの共同主催になるのです。すでに、この7試合の内2試合は、I S P S HAN DA がスポンサーするものです。それ以下の試合は、ティアツーと呼び、それが9試合あります。これら、年間16試合の全てが、「I S P S HAN DA P GA ツアー・オブ・オーストラレイジア」の試合になるのです。ヨーロッパツアーは、アジアツアーとの縁組は難航しましたが、

オーストラレイジアとはうまくやれてるのです。

これを発表するために、オーストラレイジアのCEOソル・ボーン氏も、6月6日の記者発表に出席されます。そこで、JGTOやPGA、そして日本のゴルフ界の皆さんに、友好と親善と協力を深め、アジア太平洋地域のゴルフ界を活性化したいと、切に望んでおられるのです。

ここから、JGTOの試合数が、来年3つ増える可能性が出て来ます。全ては、ISPSがオーストラリアとニュージーランドで主催する試合なので、確実です。

しかし、JGTOには、今までの規定や規約がある事は、充分承知しております。しかし、世界がグローバル化し、ゴルフ人口やゴルフマーケットが縮小し続ける昨今、このグローバル化に対応し、試合数を増やし、若いゴルファーが世界で戦える環境と場とチャンスを作る事が、何よりも大切だと考えます。それは、誰の思いも同じでしょう。そのためには、従来の規定や規約を尊重しながらも、例外的措置として、新しい枠組や取り決めを採用すべきだと確信します。

現に、ヨーロッパツアーも、サンシャインツアーも、オーストラリアツアーも、アジアツアーも、なんとかしようとして試行錯誤し、模索し、次々と新しい枠組を実行してるのです。

今、日本がこれに対応しないと、若き日本のゴルファーの、未来の可能性を摘み取る事になります。小さなこだわりや、今までの取り決めで縛られ、彼らの未来を摘み取る事は、大きな罪でしょう。大人の責任として、ゴルフ界の先達として、オールジャパンで大同団結しなければ、これから育つ若きゴルファーの、夢や理想、可能性や未来のビッグサクセスを、我々が台無しにする事になります。その想いで、ISPSは果敢に世界を攻め続けるのです。青木会長が、米国PGAになぐり込みを

かけ、前人未到の領域を開かれた想いと、同じ想いでいたいと願っております。

ビジネスの世界では、あらゆる困難に勇敢に立ち向かい、見事にグローバル化に勝ち抜いています。同じ日本人です。スポーツやゴルフ界に、できないはずはないのです。グローバル化とゴルフ界の危機に対する認識は、オーストラリアとニュージーランドは特に強く、必死です。日本よりも、十試合も少ないのです。それに同調するのはヨーロッパツアー、そこに追随するのがサンシャインツアーとアジアツアーです。この4つのツアーは交流が盛んです。

しかし、日本のJGTOはアジアツアーとは共同主催しても、まだ、オーストラリア・ニュージーランド、ヨーロッパツアー、サンシャインツアー、米国PGAとの共催はありません。過去には、米国PGAやヨーロッパツアー、オーストラリアからの要請はありましたが、みんな断ってるのです。それで、みんな中国と盛んにやっています。日本は細かい事にこだわり過ぎ、中国はアバウトなので、全てがやりやすいのです。この事で、日本がどれ程チャンスを逃がし、損したか測り知れません。何も、中国に取られる事はないのです。

思えば、6大ツアーの中で、アジアツアーの次にやりやすく、白人社会との共催が可能なのが、オーストラリア・ニュージーランドの、PGAツアー・オブ・オーストラレイジアです。時差はほとんどなく、オーストラリアは直行便で9時間で行けます。ミャンマーやインドネシア、シンガポールのプラス3時間です。そして、何よりも彼らは、環太平洋地域の一員として、ヨーロッパとアジアの中間に居る認識があります。だから、アジア人を見下さないのです。それよりも、アジア人をパートナーとして認識するので、日本人にはやりやすい相手です。だか

ら、I S P Sは私心を捨て、身銭を切って、日本と世界のゴルフ界に貢献できるよう、P G Aツアー・オブ・オーストラレイジアとパートナーシップを締結し、合体したのです。

ところで、オーストラリアの中でも、ゴルフオーストラリアとP G Aツアー・オブ・オーストラレイジアは、今まで仲が悪かったのですが、ゴルフ界の現状を見れば、そんな事は言ってもらえません。そこで、新しいC E Oのソル・ボーンさんのおかげで、関係が良くなったのです。そして、I S P Sが仲立ちをたのまれ、ゆくゆくは一つになって生き残る方向です。

なぜ、仲立ちをたのまれたかと言えば、両方のツアーの大切な試合をスポンサーしており、両方のツアーのP A T R O N (総裁) をしてるからです。また、ゴルフオーストラリアでは、グREG・ノーマンと私が親善大使をやり、P G Aツアー・オブ・オーストラレイジアでは、終身名誉会員になってるからです。

具体的には、ゴルフオーストラリアでは、野村敏京が優勝したオーストラリア女子オープンです。8年間スポンサーしています。また、P G Aツアー・オブ・オーストラレイジアでは、パースインターナショナルを4年間、ニュージーランドオープン今年からスポンサーしています。

なぜ、外国でこんな事ができるのか、不思議に思われることでしょう。

答えはこうです。今から28年前、私が37才の時、西オーストラリア州の州都パースで、家具屋とヨットのマリーナ、観光会社、牧場を買収し、家と会社と白人スタッフをかかえたからです。この時から、白人チームが豪州とニュージーランドの活動を支えています。

その翌年に、イギリスの観光会社とホテルを買収し、イギリスに家と会社とイギリス白人チームを結成しました。このイギ

リス人チームが、イギリスとヨーロッパ、アメリカ、南アフリカの活動を支えているのです。そして、豪州チームとイギリスチームが協力して、カンボジアやシンガポール、中南米の活動を支えています。

日本では、13 法人経営して、およそ二百億ぐらいの収入ですが、海外では、豪州とイギリスだけでなく、カンボジアには病院や孤児院、大学やテレビ局やラジオ局があり、百億ぐらいの収入はあります。しかし、海外のものは、すべて現地と公益のために使ってます。全てを合わせても、経済規模は大きくないですが、全ては黒字で利益率第一主義で成功してるのです。その利益を、社会に還元してるわけです。また、全ては大企業の論理で動かず、オーナーの意向で柔軟に動くので、こんな事が可能なのです。

ところで、日本にある 13 法人の一つが、文部科学省認証の、宗教法人ワールドメイトです。これは、神道をベースにする宗教法人です。天理教や金光教と同じです。

神道という宗教は、聖と俗を区別して、共存するのが特色です。また、生業と家とコミュニティーの繁栄が、神の恵みなのです。これは、全くユダヤ教と同じです。脱俗や出家思想が元となる、仏教やキリスト教、イスラム教とは根本的に違うのです。だから、法的にも資金的にも、一切の公社混同はなく、不正も違法もなく、反社会的要素は何もありません。あれば、税務署や警察、文科省が厳しく指導し、問題にします。やくざ組織や風俗、野球賭博の組織ではないのです。

文科省認証の宗教法人からの寄附があっても、それは問題のある資金や、反社会組織から流れた、汚れた金ではありません。もしそうなら、高校野球の「PL学園」「智辯学園」「天理高校」は、反社会組織の汚れた金で運営される学校です。そうすると、

天理図書館も天理市も、汚れた金で成り立つ存在です。それは、社会通念上あり得ない理解です。宗教と聞けば、何でもアレルギーになるのは、本当に日本人だけです。特に、宗教や宗教法人の何たるかを知らない、教養と知性と知識がない無知な人が、偏見を持つのです。私は、言わば宗教法人明日香宮の代表であり、角川書店の社長だった角川春樹が、クスリをやらず、ギャグを飛ばして歌ったり、演劇したり、ゴルフのスポンサーをしてるようなものです。それが、I S P Sのハンダです。これが、一番わかりやすい説明でしょう。

私は26才から、39年間「みすず学苑」という予備校を経営し、36年間、(株)ミスズで時計の製造、卸、小売業をやっています。また30年間、(株)たちばな出版の社長をしています。宗教家というよりも、普通のビジネスマンの要素の方が強いのです。それも、角川春樹と同じです。それが、神道家の特色です。神道では、「生活の中を生き貫く」のが美德なのです。

例えば、辯天宗や根源神社を崇拝した、松下幸之助。^{むなかた}宗像大社をこよなく崇拝した、出光の創業者。箱根神社を熱心に崇拝した、西武グループの創業者堤康次郎も、私や角川春樹のようだったのです。無論、私や角川春樹よりも、彼らの方がぶっ飛び方が普通でしたが・・・。

こうして、37才から豪州のビジネス社会や地域に根ざし、白人の従業員とともに、28年間社会に貢献した信頼と、信用があるので、パースの名誉市民になり、メルボルンの名誉市民になり、シドニーの市長栄誉賞も受賞したのです。名誉博士号も、ジュリアード音楽院やエディンバラ大学をはじめ、英国と米国と豪州で6つ頂きました。こういう、28年間の実績があって、ゴルフオーストラリアとPGAツアー・オブ・オースト

ラレイジアの、PATRON（総裁）になり、国際大使や終身名誉会員になったのです。

しかし、私は日本人であり、ISPSは日本の公益団体です。だから、いつも日本の事を第一に考え、日本のゴルフ界に尽くそうと、終始一貫したポリシーを持っています。

日本の男子はグローバル化が遅れています。このままでは、日本の男子ゴルフは存続の危機です。日本のゴルフ界のグローバル化のためには、小さな「しがらみ」や「こだわり」を乗り越え、オールジャパンで、日本のゴルフ界が団結する必要があると考えます。それは、みんなが思っている事でしょう。

繰り返しになりますが、経済界では、グローバル化を進め、勝ち抜いています。最近では、日産と三菱の合併です。三井住友も、三井家と住友家の合併です。保険業界や銀行、商社がどんどん合併するのは、グローバル化に対応するために、シェアの拡大、資本規模の拡大、技術やノウハウの相互交換のためです。シャープと鴻海の合併もそうでしょう。

海外のゴルフ界では、米国一強に対し、ヨーロッパツアーとサンシャインツアー、オーストラリアツアー、アジアツアーが協力し、グローバル化を進めています。その中で、日本の男子ゴルフ界だけが、グローバル化に乗り遅れ、ますますガラパゴス化しています。メディアやゴルフ界の皆さんも、同じように考えておられるでしょう。ISPSとしては、日本のゴルフ界に貢献し、盛り上げたい気持ちでいっぱいです。そして、世界で戦える日本の若き人材を、たくさん育てたいと願っています。

しかし、ISPSのできる事は、日本のゴルフ界のために線路を引き、道路を整備し、荒波を鎮めて、寒風を春の追い風にするだけです。線路を走る電車は、JGTOやPGAです。道

路を走る車は、日本のプロゴルファーです。また、波静かな海にして、春の追い風で出帆するのは、日本のゴルフ界なのです。

I S P S のできることは、それだけです。

安倍首相も、前文部科学大臣の下村博文氏も、オリンピックを見据え、I S P S のこうした活動を応援してくれています。

昨年のグローバルカップの記者発表では、J G T O を代表して、鷹羽さんが出席されました。そして、日本男子のグローバル化への期待を、熱く語ってくれました。

こうして、トップが熱く発信することで、選手もスポンサーも刺激され、試合数が増えるきっかけになればと思う次第です。

同時に、オーストラレイジアのCEOが来ますので、J G T O とオーストラレイジアとの間に、いい人間関係ができることを願っております。

これまでJ G T O では、あまり海外に窓口がなかったかもしれませんが、しかし、J G T O がグローバル化するための、地ならしはI S P S が腰低く、謙虚に、楽しく致します。とはいえ、無理押しするわけではありません。あくまで、J G T O の判断で進めて下さればいいのです。

2016年6月吉日

一般社団法人 国際スポーツ振興協会